

特254

920

文學博士 山田孝雄氏述

敬神の本義

香川縣



始



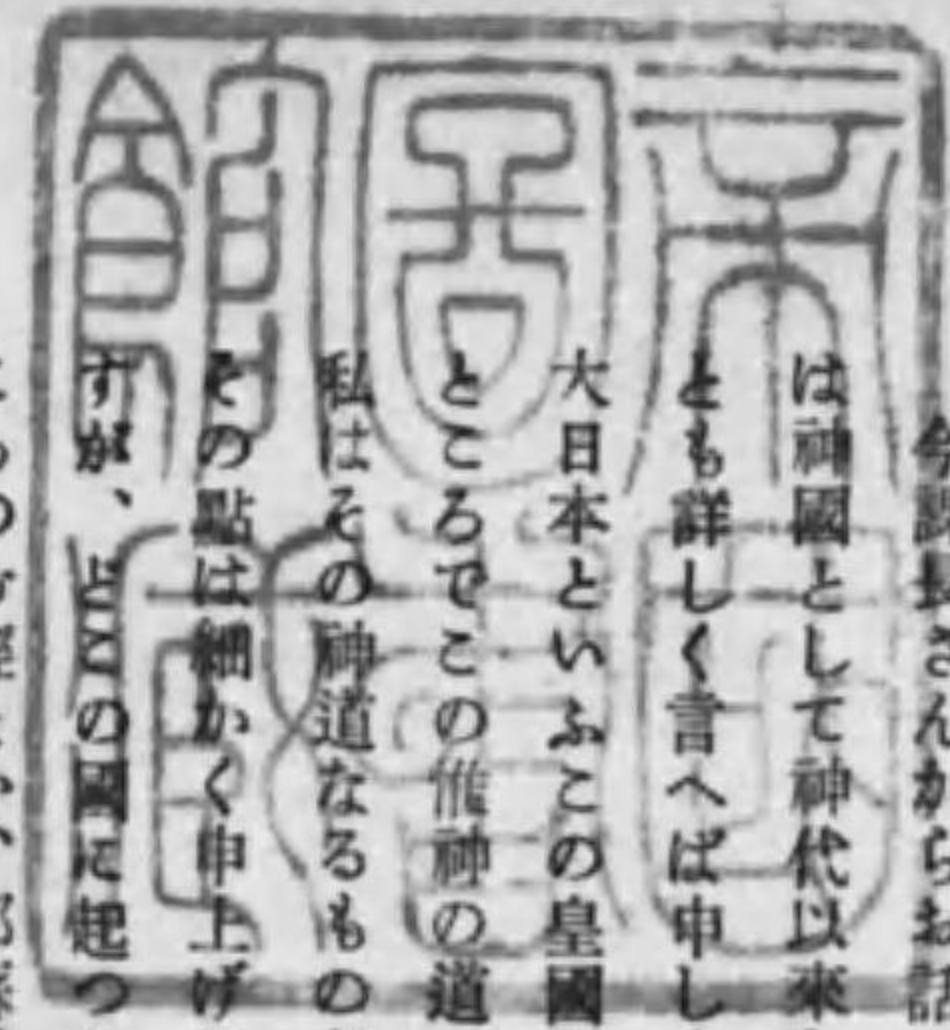
特 254
920

本稿ハ昭和十七年四月五日本縣主催ヲ以テ敬神大講演會ヲ高松市明善
高等女學校講堂ニ於テ開催シタル際神宮皇學館大學長文學博士山田孝
雄氏ノ講演ヲ速記シタルモノナリ

香 川 縣

敬 神 の 本 義

皆さんに敬神のことに付てお話を申上げるやうにといふ縣からの命令でありましたので、暫くの間私の考へて居ることを申してみようと思ふのであります。



今課長さんからお話のありました通り、我が國は昔から神の國である、神國であると言はれて居ります、この神國には神國として神代以來今日迄この國をこの國らしく傳へて來た道があります。この道を普通には神道と申す、惟神の道とも詳しく言へば申します。この惟神の道、即ち神道なるものは、先刻申しました通り、この國をばこの國たらしめ、大日本といふこの皇國をば皇國たらしめる根本の道であります。この道なくしてこの國は今日迄傳つて來る筈はない、とここでこの惟神の道、即ち神道といふものは往々外國から傳つたところの宗教と似たものゝやうに考へられ易い、私はその神道なるものが如何なるものであるかといふことを茲でお話申上げるのが眼目ではないのであります、神代その點は細かく申上げることは差控へますが、佛教とか、或は耶蘇教とか、その外回教とか、いろ／＼の宗教がいろいろ、日本日本のお經とか、耶蘇教のいふところの聖書とか、さういふやうな道を書いた書物がないか、斯ういふことをよく人から質問を受けます。併し我々のこの惟神の道、神道といふものにはさういふお經などはない、聖書などもない、固より我々が尊んでやまぬところの古事記とか日本書紀といふ古典はあります、併しながらこれは佛教のお經とか、耶蘇教の聖書といふものとは性質は違ひます。神道のことばかり書いた本でもない、今茲で古典の説明をする餘裕もありませんから、それも略して置きますが、要するにこの惟神の道は左様な書物で傳へたといふものはない。さすれば如何にしてこの惟神の道、神道といふものが傳つて來たか、これは我が國に於てはわざで傳つて來たのでありまして、書物に依つ



て傳へて来たものではない。それ故にこの本當の惟神の道、神道といふことを我々が悟らうとするためには神社にお参りをして神事に参加しなければ、本當の惟神の道といふものは悟ることは出来ない。學問で以て神道を知るといふことは無理な話であります。例へて申しますならば、魚を釣る、魚を獲るには魚を釣る書物を何百冊讀んでも鮒一匹釣れるものではない、それよりも川に行つて魚を釣つた方が早い、その方が鮒でも釣れる、少しばかり學問を致しますと、何でもかでも本に書いてあると考へ、本に書いてなければ承知しないといふ風になつてゐる。かういふ考へ方は、日本的なもの考へ方ではない。我々が朝起きて顔を洗ふその顔の洗ひ方といふものは日本人にはきまつて居りますが、その顔を洗ふ洗ひ方を書いた書物がありますか、どここの書物に日本人は朝起きて顔を洗ふ時には斯様にして洗へと書いた本がありますか、本に書いてなければ信ぜられないといふ人間は低能兒である。ところが日本人の顔の洗ひ方といふものは一種定つて居る。すつと昔の話であります、明治時代の話であります、或る人が支那の國情を探ぐるがために支那人に化けて支那人の仲間に這入つて、そして支那の國情を調べた、滿洲から蒙古、あの邊を歩いて國情を探つた。今日の言葉で言へば軍事探偵である。それでどこも變りはなかつたが、或る朝顔を洗つて居るのを見て、あれは支那人でないといふことが、今日の言葉で言へば、これがスパイだといふ意味で捕へられて支那で兎に角軍事上の制裁を受けたといふ話があります。これは有名な話で顔の洗ひ方一つで支那人か日本人か分るのであります、日本人の顔を洗ふ時には斯くあるんだといふことを書いた本は一つもありません、斯くの如く本當に人間の生活といふものは書物等に依つて傳へられてゐるものでないといふことを最初に考へて頂きたい。

惟神の道そのものは神に仕へまつる道そのものである。神に仕へまつるわざに依つてこれが傳つて來て居る、それ故本當の日本の惟神の道といふものを我々が知らうとするには、本當の心を以て神社に詣で、神様に仕へ奉るのでなければ分らない。

今までの教育の仕方を今私が非難する譯ではないが、改めて貰ひたいから申すのであります、私も小學校の教師もしたし、中學校の教師も致しました。學校の教師といふものは私は下から上まで皆やつて來て居る、そこでどんな拙いことをして居るかといふこともよく知つて居ります。結局今までの教育の仕方が悪かつたといふことは、私の今までのやり方が悪かつたといふので申すのでありますから、若し先生方が茲においでになるかも知りませんが、怪しからぬと言つて肚を立てないやうに願ひして置きます。兎に角私のやり方が悪かつたと聞いて頂いてよろしい。それは何故かと申しますと、今までの學校の教育は分つたか分らぬかといふことを土臺にしてゐた。それは勿論分らぬよりは分つた方がよろしいのは當然の話である。けれども譯が分るといふことは分けてしまふことである。すつかり分けてしまつたらそれは分つたことになる。ところが私の身体を皆さんが分けて御覽なさい、どうなりますか、こゝが首だ、こゝが手だ、こゝが胴だ、こゝが足だといふとよく分つたといふ、併しこれは口先だけで言つて居るからそれで済んで居るものゝ、本當に分けられた日にはその利那私は死んでしまふ。これは首だと言つて分けてしまふ、これは手だと言つて分けてしまふ、これが本當の分け方だから本當に譯が分つたといふ教育は、その教育自体は死んだ教育であるといふことは明らかであります。幸ひにして死なゝいのは口先だけだから死なゝいが、本當にものが分つたら終ひである。今までの學校の教育が間違ひであつたといふことは、こゝに或る先徒はあの先生の話はよく譯が分るといふ、先生の方も分つたとなりましたらそれで得々として歸りますが、これをよく考へて見れば、こゝが間違ひである、考へて御覽なさい、この事は今日我々が慰問袋等を送る時のことを考へるならば分ります。隣組に於て慰問袋を送る、私が世話役になつたと致します、五圓ならば五圓といふ金を一つお前に委せる、これで然るべき品物を買ひ整へて送つて呉れと言はれる、私はそれを以て然るべき品物を買ひ整へたと致しましても、併し自分が個人で送るのでないからして隣組の人に皆見て貰はなくちやならない、又汚なく考へて金を少しでも誤聞化すといふやうに考へられるのはよくないからそれを見て貰ひたい、

それで隣組の人に集つて貰つて、半紙が幾ら、ハンケチが幾ら、何が幾らと言つて總計五圓なら五圓といふ金と品物がびつたり合ふ、左様にならべて置きます、さうするとこれは辻褃が合ふから譯が分つた、これは本當に譯が分つたのである。左様にして譯が分つたまゝで置きましたならば、何時慰問袋になるでせうか、百年置いても譯が分つたまゝ慰問袋になる見込みはない、品物が別れ／＼になつて居る、これが譯が分つたといふことである。これが慰問袋になるにはその譯の分つたものが一つに纏つてしまはねば慰問袋にはならない。一つに纏めて全部を袋の中に入れてしまはねばならない。併し入れてしまつただけではまだ慰問袋にはなりません、それに今度は荷造りをする、宛名を書き、そして郵便局なり、鐵道なりに持つて行つて、これは私共の作つた慰問袋であるから戦地に送つて下さいとその精神を傳へねばならない、その精神が郵便局員なり、鐵道員なりに傳つて、そこでそれが慰問袋としてはじめて發送されるのであります。これは人間の心持が這入つてゐなければ慰問袋にはならない、譯の分つたものを纏めて一つにして、その一つになつたものゝ上に我々の魂がそこに通はねば慰問袋にはならない、今までの學校教育は譯が分つたかといふことに重きを置く、これは譯が分らぬのよりは分つた方がいゝには間違ひはないが、それを一つに纏めなければならぬ。更にその上にもう一つ魂を入れなくちやいけない、譯が分つたといふことを以て得々として歸るやうな先生は纏めることを忘れ、魂を入れることを忘れて居る、さういふ教育をしてそれでどうして間違ひが今まで起らなかつたかと言へば、それは先生より生徒が偉いからである。先生は譯が分つたと言つて得々として歸つて行きますが、あとで生徒が自分の頭で纏めて魂を入れて居るからである。本當にその譯の分つたまゝバラ／＼にして置いては魂が入る筈がない。私は何故斯様なことを申すかと言へば、神道のこと、惟神の道を譯の分るやうに説明してみろといふ人があるからである。説明などはどうでもいゝ。この惟神の道を我がものにするればそれでいゝのである。目的は説明にあるのではなくして、我がものにするところにある、悟るところにある、例へて申すならば、三味線、俗なやうであります、三

味線を弾く時を考へて御覽なさい、徳川時代の三味線のお師匠さんは音階とか旋律、リズムといふ難かしい問題は一つも知らないけれども上手である、教へるにしても音の出るところの甲どころ、三の糸の甲どころはこゝだと言つて教へ兎に角そこを抑さへてさうして撥をあてるといゝ音が出る、それからこゝを抑さへたら出ると言つてそこを抑さへると成程出る、その次はこゝだといふ譯で、甲どころとは何ぞやといふことは分らないけれども、兎に角その甲どころといふものを知つて居る、譯は分らなくてもそれが我がものになつてゐる、それで三味線の師匠は説明するために師匠をして居る譯でなく、三味線を上手に弾くために師匠をして居る、譯が分らなくても、我がものになればそれでいゝ、あらゆるものを人間の力で解釋してしまはうといふ、そんな大それた考へを有つて居る人はそれこそ何にも分らぬ人間になる。徳川時代の教育の仕方は斯ういふ仕方である、そして立派な人が出て居る、明治以後の教育は努力は非常に多いけれども立派な人がその割に出て居らない。

それは何のためであるかといふと、譯の分ることばかりを眼目にして居つたから斯うなるのであります。私は今茲で學校の悪口を言つて居るのでもなく、教育の悪口を言つて居るのでもない。神道そのものを譯が分るとか、分らぬといふことを眼目にしてお話するのではないといふことを申すのであります。我が身のものにする、理窟が分らうが分るまいが、我がものにするところに眼目があるのであります。さういふことを話す積りで斯ういふ話をした譯であります。

結局この惟神の道、神道といふものは學問的に申すならば申すこともありませんけれども、皆様に今日申上げる敬神の道と致しましては、結局神様に仕へまつるわざといふことに付ての考へがなければ本當の敬神の實は學がらない。それで神様に仕へまつるわざは何かといふに、そのわざといふものは二つある、何であるかといふとお祭をするといふことゝ、お祓をすること、この二つしかない。どこのお宮のお祭にでも行つて御覽なさい、必ずお祓をする、そしてお祭をする、祭といふ言葉は廣い意味で申しますれば、神様の前で　私も今田村神社にお参りをして参りましたが、そこで

先刻の神宮遙拜と同じやうに二拜二拍手一拜をする、それでも廣い意味のお祭です、その前に田村神社で矢張りお祓を受けました。この祓をうけ祭をする、この二つのわざを實地に我が身に休して行つて見た人でなければ、惟神の道といふものは空理空論、口先ばかり、そのことに付てこれからお話を申上げてみようと思ふのであります。

即ち茲で敬神といふ言葉の説明からは始める必要があると思ふのであります。敬神といふことの根本は神を敬ふといふ意味ですから、人間が神様に對してまことを捧げる、眞心を神様に捧げ奉る、これが敬神といふ言葉の意味であります。神様がなくしては敬神にはならず、敬ふものがなければ敬神ではない。何者が神様を敬ふかといへば人間が敬ふ即ち敬神といふことは神と人との間に起つて來る一つの事實であります。これが敬神といふことの根本の意味であります。これに付ては從來この敬神の道を如在之禮と云うて居りまして、平安朝頃からは往々日本の敬神の道を如在之禮と云つて居ります、ですから平安朝頃の然るべき書物に如在之禮と書いてあるのを御覽になれば、これは所謂敬神の道に指したといふ風に御考へになつてよいと思ひます、併しながら私はこの如在之禮といふ言葉は本當の日本の敬神の道には向かないものであると思ひます。支那人は斯様に申しましたが、我々日本人の本當の敬神の道としては如在之禮ではいけないと思ひます。この如在といふ言葉は御存じの通り論語にある。論語に孔子の言はれた言葉にあり、祭ることは在すが如し「神を祭ること神在すが如し」と斯様なことを言つて居る。これは支那人と致しましては祭の極致を示して居る言葉と言はれて居ります。即ち支那の書物でこれを解釋したのを見ますと、聖人神に仕へる所のまこと斯くの如し、聖人が神様に仕へまつるまことの姿はこの通りであると申して居りますが、私はこの考へ方は賛成出来ない。支那人はそれでいゝかも知れないが、日本人としては賛成出来ない、神様をお祭するのに神様が在すが如し、神様が在すが如くしてお祭をしなければならぬ、茲に神様を祭る時はおいでになると同じやうにして祭らねばならぬといふ、おいでにならぬやうに考へて祭るよりはよいに定つて居るけれども、如しといふ言葉は本物でない。あなた方でも失禮ながら

人間の如しと言つたら非常に憤慨せられる。人間に對して人間の如しといふことは、これは非常に失禮な言葉であります。親に對して成程親の如しなんと言つたら、これは甚だ失禮な話である（笑聲）親の如しと言へば親ではないが親のやうだといふことで、親でない者に對しては非常に立派な言葉であるが、親に對しては非常に失禮な言葉である。猿の最も進化したものを見て人間の如しといふことは非常にいゝが、人間を見て人の如しといふことはその人を侮辱して居る譯です、人間でないといふことを言つて居る、それと同じ様に神を祭る時に「神在ますが如し」といふのは、實はおいでなさらぬといふ考へがなくはならない。おいでなさらぬといふことを肚の底に有つてゐて、それでも「在すが如く」と考へてお祭をする。居らぬといふことを信じて居つて在すが如しといふことになれば、これは非常に立派なものでありませう。併しながら我々はそれでは神様を侮辱して居るものと斯様に考へます。これに對しては我々が不斷使つて居る言葉に「如才無い」といふ言葉がある。日本では如才といふ言葉を俗語として如才が無いといふ、この如才といふ俗語は元來論語の如在といふ言葉から起つたのでありますが、この方は意味が徹底して居る。あの人は如才が無い人だといふと、人の來た時少しも隔てのないやうに十分にその人を手落ちのないやうに待遇をする、さういふ人は如才がだといふと、人の來た時少しも隔てのないやうに十分にその人を手落ちのないやうに待遇をする、さういふ人は如才が無いといふ。若し如才があつたらどうなる、あの人は如才のない人だといふことは結構であるが、如才のある人であつたら大變なことになる。だから古い書物を見ると「不存如才」と書いてある、そして考へて見ると、我々の中頃の先祖足利時代頃の人達でありませうが、それが論語から出たか、何から出たかは御存じないと思ひますが、才の字を書いてある。それは論語を読んで學問して居るよりも遙かに人間としてはましである。我々は神に對して如才を振舞つてはならない。人間に對してすら如才があつてはならぬのであります。神様に對して如在といふ考へで見るといふことは日本人としては怪しからんことである。詰り神様が在るやうな心で居るといふことは神様を侮辱して居ることになる。そこで敬神の道といふものは左様な支那的思想で考へるといふことはいけない。又神を祭ること神如在といふことはどう

も形に捉はれて居るやうに思ひます。形に捉はれた考へ方で敬神の道を考へるのも間違ひであると思ひます。

左様に致しまして、この敬神の目標がどこにあるかと申しますと、神様は實際においてになるといふ所の信念、それに土代があるのであります。若し神様はおいでにならぬものと考へて来れば、おいでにならぬものをどうして敬ふか、敬ふ相手がない神様の存在といふことを自分は信じない。そして人に敬神を説いてみてもそれは結局嘘です、敬神といふことの根本は神様がおいでになるといふことを土代にしなければどうしても起つて来ないものだ。これは明らかな話であります、極めて明瞭な話であります。左様に致しますと、それならば神様の存在は信じられるかどうかといふ問題です。大体神様の世界といふものを見たことがない、即ち我々は見たことにはない、若し神様を見ることが出来ればその人は神様であるからもう人間ではない、人間としては神様は見られないのが當然である。神道の傳へる所に依れば神様の世界は我々の目に見えない世界、これを幽世くわいせいと言ひ、我々の人間の世界は目に見える世界、これを現世うつしよと斯様に昔から申して居ります。我々のこの現世から現實のこの人間の世界から神様の世界は見えない、併しながら幽世、神様の世界からは我々の世界はまるで見えて居る。その姿を昔平田篤胤といふ先生が弟子に譬へを以て教へたことがあります。篤胤の門人が「先生神様はおいでになりますか」と尋ねた時「おいでになる」と答へられた。神様のおいでになることを學者として本當に信じた人は私共の存じて居る間では平田先生程の人はない。この人は口先ばかりでなく、神様の存在を信じて疑はなかつた人でありました。門人が左様に聞いた時に「お前達ははまだものゝ考へが足りないから神様の世界が分らない、兎に角我々の人間の世界からは神の世界は何としても見えない、幽世である、ところが神の世界からは人間の世界は丸見えである」それを例へて以て教へてやる。二つの座敷がある、大きな座敷と小さい座敷、一方の座敷に昔のことであるから蠟燭をカン／＼と灯して居る、隣の座敷は眞つ暗にして置く、そこで両方に座つて見た時、明るい座敷から暗い部屋は見えないが、暗い部屋からは明るい部屋がよく見える、嘘だと思ふ若い方は今夜内に歸つて實驗して

御覽なさい。明るい部屋から暗い部屋は何にも見えないが、暗い部屋から明るい部屋はよく見える「神様が我々を所謂幽世から見て居られるといふのはこの通り、お前達が何をやつてゐても皆分つてゐる」と、左様に皆様考へて御覽なさい、實に恐ろしい話です、人が知らぬだらうと思つて居るけれども、神様からは見えて居る、暗い所から見居るからよく分る。幽世、眞つ暗な世の中、斯様な風に我々の祖先は神の世界と人間の世界を考へて来た、これを現世、幽世といふ。

斯様なことを私が申しますと、さういふことは證明出来ないではないか、神様がおいでになるとか、おいでにならないといふことは證明出来ないではないか、斯様なことを申す人があるかも知りません。併し我が國は如何なる國であるかといふこの國の根本の姿を我々が考へて来ましたならば、我々の祖先が斯様に考へたことは決して間違ひでないといふことを我々が確信することが出来ると思ふ。それは何であるかと言へば、先刻もお話のありました大日本は神國なりといふこと、この國が神の國であるといふ考へ方、この國が神國であるといふことを十分に理解致しますならば、今私の申したことはお分りになると思ひます、一休この國が神國であるといふことは如何なる意味を有つて居るか、神國といふ言葉を簡単に考へますと、神様がお守り遊ばす國といふ意味で神國と考へ易い。無論神様がお守り遊ばされない神國などといふものはあるものではないのでありますが、併しながら神様がお守りなさる國を神國といふだけならば、さういふ意味の神國は、今我々が正面の敵として戦つて居るところの英國の如きものも神國といふことが出来る、その證據に英國の國歌を読んで見ると、英國の國歌のはじめの文句を直譯すると「神よ、王を守り給へ」と直譯出来る。然らば英國は、神様が守つて居る、又神國といふ言葉は、元來は支那の言葉であります。支那の古い書物にも神國といふことを言つて居る、然らば蔣介石も、我が支那は神國なりと考へて居るに相違ない。矢張り神様が守つて居る積りです。さういふ意味の神國ならば、世界の國は皆神國でせう。併しながら我が國が神國だといふことが、さういふ意味だけでなく、まだ／＼深い意味がある、我々の古典であるところの古事記、日本書紀、又古事記、日本書紀に漏れて居るところを補

つたと言はれる所の古語拾遺、これらの古典を通じて見ますと、何れの古典に於ても一番はじめに神様の話が出て居りまして、そして伊邪那岐、伊邪那美二柱の神様が、この大八州の國をお産みになつたといふ話が出て居る。この國が生れたといふ話が古典の最初に出て居る。この國が生れたといふ話が一段落ついてからはじめて我が國の歴史の記述がはじまる。どうして國が生れたといふことがはじめにあつてその後歴史の記述がはじまるかといふと、先づこの國が生れたといふその國體そのものを説明して居るのであります。國體が分らなくして、歴史といふものは分るものではないといふ我々の祖先の非常に偉大なる考へ方から、斯ういふ記述になつて居ると思ふのであります。

そこでこの國が生れた國であるといふことを我々考へて見ると、こゝに我が國が神國であるといふことの本當の意味が分るのであります。我々は西洋の歴史を學び、支那や印度の歴史を學ぶ、西洋の歴史を讀みましても、支那や印度の歴史を讀みましても、その國の創生じじまうがそれ／＼説明してありますけれども、その國が生れたといふ説明をして居る歴史は一つもない。國が生れたといふ言ひ傳へを有つて居るのは世界の中で唯大日本、皇國これ一つしかない。たつたこの一つの話で以て世界中の總ての國々と違つて居り、我が國が日本國として根本的に違ふといふことを我々は認める。一體我が國の教育に於て西洋の歴史をやり、支那や印度の歴史を學ぶのは物識りになるためではないのであります。今までの歴史の教育はこの點に於て間違ひであつたといふことを明瞭に申上げることが出来る、歴史といふものは暗記ものだと言つてゐた、暗記もので記憶力を養成するのであるならば、歴史をやらなくても、もつと簡単な記憶力の養成法はある、そして歴史は覺える力を養成するものと考へて居る人は全くどうかして居る。私共の考へで申すならば、歴史といふものは見識を養ふ學問であります。西洋の人間はどういふ人間か、支那といふ國はどういふ國か、殊に多くの見識を我々が得るのは今も申しましたやうに、西洋の歴史を學んで西洋の國柄を悟り、支那の歴史を學んで支那の國柄を悟る、兎に角悟るので覺えるのではないけません。分つたといふのでなく悟る、我がものにする、そしてその支那の國柄、

西洋の國柄と、我が國の國柄とを比較して見て、茲に我が國體といふものは世界に類のないものであるといふことを我々が認める、そこまで行かなければ我々が支那史や西洋史を日本の教育として學ぶ必要は更にない。今茲に學生諸君が居られますが、私とその學生諸君と西洋史の同じ問題を以て點數の競争をすれば、私は落第すると思ふ、諸君は百點を取つて、私は五點位しか取れないと思ふ。左様に皆忘れてしまつて居る。併しながら四十何年前に讀んだ西洋歴史のその根本の魂だけは持つて居る。實例を申すならば、私がすつと昔西洋の歴史を研究して居つた時分に、クリミア戦争の歴史を讀んだ、その歴史を讀んで居る内に、英國人は自己の利害が變ると一朝にして、昨日まで有つてゐた主義主張とは正反對の行動に出てくる、そして今まで味方であつたのを突きとばして居る、そのクリミア戦争の歴史を讀んだ時に英國人の根性はそれで分つた。今日の戦争を考へてもさうである、今までは日英同盟をして日本人を出来るだけ自分の道具にして使つて居りながら、一朝にして自己の利害が變ると、行きなり日本を排撃しようとした態度はクリミア戦争の歴史を讀めば分る。私共が西洋史を學ぶ態度はさういふところにあると考へて居る。誰がどこで戦争したかといふことは忘れてもいゝが、この時英國はどんな態度を執つて居るかといふことはしつかり覺えて置かねばならない。さういふために我々は西洋史を學んで居ります。

そんな事柄を今茲でお話すれば涯しもない話であります。一例だけに止めて置くのでありますが、歴史といふものはさういふことのために學ぶのであるといふことを若い學生諸君は肝に銘じて置いて頂きたい。點數等は取つても取らなくともよろしい、落第さへしなければよろしい、昨日迄落第して居つた人もあとで天下の名士位の話でなく、實にみごとくな事をした人がいくらかもある。それらの人々は名前等は一々あげずともいゝ、現に私がある中學の教師をして居る時分に、わざ／＼私の發議に依つて落第させた生徒が居る、私が主張して落第させてしまつた。併しその生徒は私が一番可愛がつて居る生徒である。可愛がつて居るから及第させるかとさうでない。出来ないものを落第させるのは當然であり

學問が出来ないから落第さす、併し乍ら人物はこの上もない立派な人間であつたので、私は非常に可愛がつた。又その男は中學の二年三年の時分、既に先生以上の人物であつた。學問は特別にすぐれてはゐなかつたが人物はなかくすぐれてゐた。その人間は森下與一郎と申して、後に海軍少佐で舞鶴沖で驅逐艦が事故に依つて沈没した時、自分は航海長であつたから責任があると云つて、艦と一緒に死んでしまつた。その時分の記事を御覽になれば分りますが、私は森下ならそれ位の事はやるだらうと思つたが、人間といふものは學問だけではいけない。魂が出来てゐなくちやいけない。私は學問では落第させて居るが、魂ではこれ以上の男はないと思つた。それで私は始終一緒に歩いて歩きました。私が舎監をしてゐて寄宿舎にゐた時分日夜私は歩いて歩いた男です。私の教育の仕方はさういふ教育の仕方をして來て居る。これは餘談ではありますが、兎に角人間といふものは見識が必要である。其處でこの外國の歴史をやつて我が國といふものを我々が比較研究することに依つて明確に認識することが出来るのであります。若し我が國といふものが眞白のものであり、西洋の國体が眞黒のものであると致しますならば、黒い紙の上に白い紙をのせれば益々白い紙が白く見えるではありませんか。この國体の研究方法は何も私の新發明ではなく、今より六百年前北畠親房公が神皇正統記を書きました時に、印度の國体、支那の國体を説きまして、そして最後に三國の國のはじまりは斯くの如く違ふと申して居ります。何故三國と申しましたかと言へば、その頃には世界は天竺と支那と日本と三國しかないと信じてゐた、だから世界中の國体をこれに依つて比較研究した、六百年前に我々の先祖が外國の歴史に依つて國体の研究をして居るのに、六百年後に生れて西洋史を學んで居りながら、我が國体が支那と日本とどう違ふか、西洋と日本とどう違ふかも分らぬやうな教育の仕方をする先生も先生だが、分らないで平氣でゐる生徒も生徒です。これを直して貰はねばならない。現在の教育に於て文部省が一所懸命になつて教育の革新を考へて居ります、今年の四月一日から文部省が御存じの通り高等學校の教科といふものを根本的に改めました。又昨年から小學校が所謂國民學校といふものに變りました。

これは何も學校の名前を變へるとか何とかが目的でなく、根本の考へを日本的に立直せといふのが、この改革の根本精神であります。

其處で今申しましたやうに、この國は神様がお生みになつた國である、斯ういふ考へ方、かういふ説明の仕方は世界中どの國にもない、何處の國にもないといふことは、どの國も我が日本國と違つて居るといふことを、これで明確に示して居るのであります。そこで我々の祖先はこの國が伊邪那岐神、伊邪那美神二柱の神様がお生みになつた國であると一口に言はれるので、それが我が國体といふものは世界無比の國体である、有難い國であるといふことが、いきなり身にしみて我がものにしてしまつたのであります。ところが今日の人は仲々さうは行かない、さうは行かぬといふのは、譯が分かるといふことばばかりを考へるからです。どういふ譯だといふが、どういふ譯であるか、どういふ譯があるかそんなことは知らぬ、兎に角、我が國は神國なりといふだけである。どうも譯が分らぬと承知せんといふ考への人は始末が悪い。例へて申すならば、人間とは何ぞやといふ問題を出して御覽なさい。誰がこれを説明出來ますか、二千年前のギリシャの大哲學者から今日の哲學者に至るまで、斷えず研究して來てゐる筈である。しかしながら人間とは何ぞやといふことは矢張り分らない。併しその説明がいかぬから人間でないかといふとやつぱり人間である。人間とは何ぞやといふ問題の説明が出来ないから人間は居らぬとなれば、皆さんも私もこゝに居る筈はない。人間とは何ぞやといふことが分らぬから人間でないとは言はれない。人間は矢張り人間である。唯その學問がどうかして居るといふ話です。昔鯨といふものは魚だと思つてゐた、だから魚扁を書いてあり、魚扁を書いてあるから魚だと思つたが、近頃は獸類の仲間に入つて居り、一体どちらかと鯨に聞いて見ても黙つて居る(笑聲)私は獸類だとも、魚類だとも言はないで沖を泳いで居ります。この國が神國であるといふことは我々の祖先はつきりと自分の胸に俗な言葉で言へばピンと來てゐる。それが今の人はピンと來なくなつて居るらしい。そこで茲で少しばかりその神國といふ言葉の意味を説明して見

今神様がこの國をお生みになつたと申しましたが、あなた方は誰がお生みになつたか、失禮ながら馬や牛があなた方を生む氣づかひはない。両親は人間であるに相違ない、人間が生めば人間が生れてくるのは當然の話、そこで同じく伊邪那岐、伊邪那美の神様がこの國をお生みになつたといふ、これが両親、神様がお生みになつたものならば、この國自体は神様です。さうでなければ不合理である。馬や牛の子に致しましてはその通りである、神様の子に神様でないものが生れる筈がない。即ちこの國自体が神様だといふことが、大日本は神國なりといふ考へに基づいてゐるのであります。神様がお守りなさるといふそんな低級なものではない、大八州それ自体が神様であり、この國全体が神様である。これが日本の國といふものを考へる最初の問題です。

次にこの國が生まれたと致します。これは親になつて見れば分る。子供の内には分らないが、親になつて見れば分る。即ちよく／＼自分のよつて來る處のことを考へれば親にならなくても分るに相違ない。凡そ生れるといふのは如何なることであるか、生命のあるものが生れてくる、生れてから生命が生じるのではなくて、生れぬ前から、お母さんのお腹の中に於て既に生きて居る。生きてゐて飛び廻つて居る、お母さんは時々たまらない感じがした筈である。それが或る時日を経て腹の中に居ることが出来ぬやうになると外に現はれる、これを生れるといふ。生れる者は生れない前に既に生命を有つて居る。凡そ生命を有つて居るものは必ず生れるもので作ることは出来ない。日本語の作るといふことは或る材料があつて、それに人間のある働きを加へて何かにする、それが作るといふことである。例へて言へば茲にコップがあるが、これは硝子があつてその硝子に人間が働きを加へるとコップになる。これが作ることである。米や麥もその通り、種があつて人間が努力すると澤山の米が出来る。凡そ生命のあるものは生れるものでありまして作るものではない、従つてこの國は生れた國であつて作つた國でないといふことになりますと、これで我が國体といふものは世界のど

この國とも違ふといふことは明らかであります。天皇機關説等といふものゝ起りは、國は作つたものと考へるから起るのであります。

次には生れたといふことになれば、斯ういふ生命ははじめからあつたといふことで、生れたといふ一言で以て我が國体は世界無比といふことがはつきり分るが、生れるといふことをもう少し説明して見ますならば、はじめ親といふものは生きて居る、死んで居れば子供は生まれません、生命ある親から、即ち根本の生命から一つの生命が分れて出てくる、詰り親の生命が分れて子供の生命になる、その姿は蠟燭を灯してみれば分る、一本の蠟燭からその次に行くとき燈がつく一本の親の蠟燭で一方の蠟燭に燈がつく、物質的に蠟燭を澤山ならべただけでは燃えませんが、燃える姿が生命のある姿、あとから燃えた蠟燭は親の元の蠟燭から見れば子供です。斯様にして一つの生命から分れて新たに生命を受けてくることが生れると稱する。生れるといふことは斯ういふことです。だから生れる前に親は既に在る、生れる前に生命があり、その生命は親から分れて出て來たものである、親から分れて獨立の生命、獨立の魂を有つて自分の活動をはじめてくる。これが生れた姿といふのであります。そこで生れた人間を土代に考へて見れば、自分の生命、自分の魂といふものは實は親の生命から分れて來た、親の魂から分れて來たものである。若い方がおいでになります、あなた方の生命といふものはお父さん、お母さんの生命から分れて出て來て居る。お父さん、お母さんの心が分れてあなた方の魂になつて居る。それを元に遡つて考へて御覽なさい、今茲に居る人の親は又その親から分れて來て居り、それから段々と遡つて行つて御覽なさい、結局根本の一つの大きな生命といふものに戻つてしまはねばならない。これは實際人間の生れることを考へて見れば分ります。子供を持つて居る人が考へれば直ぐに分る。自分の生命があゝいふやうに分れて居る、自分の魂が分れて子供になつて居るといふことは親から見れば分る。さういふやうにして、我々が逆に遡つて考へて見れば、結局根本の一つの大きな生命といふものがあり、そこから分れて來た、生れた姿は皆それです。その根本、

根源になる所のある生命、これを神様と言ふのであります。斯様な風に考へますと、我々は根本の生命から分れ／＼て来たものだといふことは理論的にも言ひ得る。その根本の生命が神様、即ち人間が自分の祖先を神様と考へることは、これは最も正しい思想であると思ふのであります。

斯様にして我が國は神國であるといふ考へ方が生れたのである。我が國が神國であるといふ考へ方を煎じつめて行けば、結極神様の存在といふことを信ぜねばならぬといふことは當然であります。所が茲に斯ういふ事柄が實際ある、私が唯今申した通りの話ではありませんが、これに似たやうな話を致しました時に、京都に居る或る人から私の所に手紙をよこして、それは私はこの國が生れたといふことに付ての説明をラジオで放送した時の話ですが、「君の話は自分は賛成だ、賛成ではあるが、君はあの伊邪那岐、伊邪那美の神様がこの國をお生みになつたといふことを事實と考へて居るか、何故信念と言はぬのか」斯ういふ質問が来たのであります。それで私は直ちにその質問に答へました。外のことと別だから直ぐに答へた。相當長い手紙をやつた筈です。私のその返事は細かいことは覚えて居りませんが、心持だけを申しますと「あなたがどういふ心持でさういふことを私に言つて来たかといふ意味は分る、併しながら私があなたに聞きたいことがある、あなたには信念といふものと事實といふものを區別して居られるやうだが、併し私は一日でも過去になつてしまつた事柄は事實即信念といふより外仕方がないと信じてゐる。信念と事實といふものをどうして區別するか、その區別の仕方を教へて貰ひたい、若しその區別が明確になれば、私はその上で又答へる」と言つた手紙を出した。これはどういふ譯でさう云つたのかと申しますと、普通に西洋の學問を中毒的にやつた人は證據がなければ一切事實でない、斯ういふやうに言ひ易いのであります。従つて信念と事實とをば證據があるかないか、證明が出来るかどうかといふことに依つて分けよう。斯様に考へるらしいのであります。私は仲々そんなことで事實だ、信念だと言つて分けることが出来ないものと今でも信じて居ります。事實といふのは私が今茲で皆さんに話をして居るのは事實で間違

ひはない。併しながら先刻茲に参ります以前に田村神社に私が参りをしたといふことは、最早今に於てはやかましい意味でいふ事實ではございません。午前十時過ぎに田村神社に行つてお参りをした、私が確かにお参りをしたといふことは間違ひはない、けれどもそれを事實として證明して見ると言つても、最早出来るものではない。今は既に過ぎ去つてしまつた今日の午前十時にはならない。元には戻らない、併しこれは事實、その時に皆さん方は私がさういふと確かそれは事實だらうと言つて信ずる。山田はまさか嘘を言ふまいから田村神社に参つたことは事實だらうと信ずるだけである。茲に於て嚴密な意味でいふ客觀的事實といふものはこゝには復現することは出来ないものであります。凡ゆる事柄は、それが一瞬間でも過去に屬してしまへば最早事實ではない、それを事實と信ずるより仕方がない。さういふ場合に於て過去のことを全部證明しなければ信じられないとすれば、殆ど證明の出来ないものが多數ある譯です。私が昨夜六時頃に伊勢から汽車に乗つてそして宇野まで今朝六時頃に來ましたが、是も事實であるけれども、皆さんが若しそれを信じないとすれば、何に乗つて来たか分らぬ、行つて見たことでもなしとなつてくるに相違ありませんが、私をあなた方が信じて下さるならばさうだらう、それが事實だといふ。併し誰が事實としてそれを客觀的に證明出来ますか。私自身すらも出来ない證據には四月四日の午後六時二十五分といふ時間はもう二度と出て來ない、時計を逆に廻すこともいけない、斯うなれば信念以外何のものもない。さうなれば信念即事實といふ外は無い。裁判所で裁判官が裁判を致します「どこそこにゐたか」「おました」これを裁判官が信じなければ事實とは認めない。事實と信ずるか信じないかは矢張信念の問題である。そこで被告が嘘を言ふか、本當を言ふか證人を連れてくる「あの人が斯ういふことを言ふかお前はどうか思ふか」「その通りです」といふ、もう一人の人に訊くと「その通りです」さうすると裁判官はそれを事實と認める。喧嘩をして頭を殴つたといふ事實は過ぎ去つて居るから見られない。ところが證人になる人が私が見ました、甲の人も乙の人も見たといふ、裁判官は見えてゐないが、甲も乙も見たといふ經驗はあるけれども、事實に現はすことは出

來ない、そこで裁判官はどうするかといふと、甲の人、乙の人の言ふことを信することに依つて、甲と乙の言ふことを事實と信する。斯うなつて参りますならば、信念は事實と同じもの、そこで神代の話などは證據があるかないかといふそんなことは問題にしない。分るとか分らぬといふことは問題でないと最初に申しましたが、何事も皆事實といふものは證明出来なければ事實でない。斯様に若し考へるならば、あなた方の身体の上に大變な問題が起つてくる。それはどういふことであるかと言へば、親から子供を見れば、これはお母さんはあなた方を生んだ経験を以て居られるからこれは事實です、あの子は生れる時に身体はどこに何があつた、あの子は生れた時に頸の下に黒子があつた、肘のところには痣があつたといふことをお母さんは見て居る、大きくなつてみると矢張りそれが残つて居るから、どういふ場合に於ても間違ひなく分る。ところが子供から親は證明出来ない。私が生れてオギヤアと泣いて見たあの顔が親だといふやうなことは一人も云ひ得ない。この場合に於ては自分の最も信する所の兩親から、お前は俺の子だと言はれる、又自分の見さんなり、姉さんから私の弟だ、妹だと言はれる、親類の人もさう言はれる、近處の人もさう言はれる、さうして自分はさうであると信じて疑はない。これは事實であります。若し證據が必要といふなれば人間の子一人も親といふものが證明出来ない。證據がなければ事實でないといふ、さういふ間違つた考へをせられるのは日本人ではありません。

日本の學問は信するといふことを土代にして起る學問であり、西洋の學問は事實かどうかと疑ふことを土代にして居り、そこに間違ひが多い。我々は信するといふことを土代にして居る、どうしても信じ切れない時にはじめて疑を起して研究し出す、一々親を自分の親であるかないかと吟味して親だと認めて居る馬鹿者は一人もない。日本人の物の考へ方の根柢はこゝにあるといふことを考へて頂きたい。既に今申しましたやうに、自分は自分の兩親の子であるといふことを信じて疑はないと致しますと、これを土代にして考へるならば、我々の子孫が我々祖先を信じて疑はないことは間違ひない、その信といふことを以て國が續いて來て居る。それを廻つて考へるならば、我々の祖先がこの國が生れた國

と言ひ傳へて來た、それを我々は信ぜざるを得ないのであります。信といふことを土代にして考へるならば、そこまで行かねば本當の信といふことにはならぬのであります。證明出来る出来ないは別問題である。學問が進歩してくれば證明出来るかも知らないが、今居る人間は一人残らず自身自身の存在を疑はない、疑ひの極に達すれば、結局自殺でもしなければならぬやうになる。下手な西洋の哲學にカブレて自殺するのは皆これである。分つても分らなくても信といふものを土代にすれば、先刻の三味線の師匠のやうに勘所とは何ぞやといふ理窟は知らないが、良い音がする、調子も何だか分らないが、こゝを抑へるといふから抑さへると良い音がして三味線上手といはれる、勘所の説明が出来なければ三味線が弾けないといふものではない、この國を神がお生みになつた國といふことはどういふ意味か分らないから信ぜられないといふやうな人は日本に居らんでもよい、自分の親を信じないと同じことである。

斯様にして我々は我々日本人の據つて立つ所の根源を神と信じて居る。この神を信するといふことに依つて敬神の根本が立つのであります。結局我々の祖先といふものを神と信じて、その祖先の大本であるところの祖先の祖先、これを根本の神様と信する。茲から敬神が起る、今若い方々にはこれは分らぬかも知れない。併し理窟は分らぬけれども、あなた方がお父さんになると分る。それまでは山田といふ男は妙なことを言つたと思つて置いてよろしい。段々と分つてくる、一べに分らなくてもよろしい。兎に角斯ういふことを聞いたといふことだけを忘れやう／＼と思つて頂くと尙よろしい。どうも忘れやうと思ふと仲々忘れられないものですから(笑聲)その内にあなた方の考へ方が本物になる。兎に角これはお父さんにならぬとこの生れたといふ話は分らない。お父さんお母さんになるまで暫く我慢して聞いて下さい(笑聲)先づ神様が存在する、我々人間が存在して居る以上は神國である我が國に於ては、我々の根本は神様であるといふことは當然の話、結局自分の元を神様と考へて居るから何の不思議もない話である。

次に今度は敬神の敬、敬ふといふことはどういふことか。これを一應説明を致します。敬は敬ふであるが、うやまふ

のうやは恭といふ文字に當るのであります。その恭といふのは心のうちにつゝしむ所あるをいふのである。その恭と似て非なるものをいふのに支那の言葉で足恭といふのがあります。これの古い日本の讀み方ではねこうやと言つた——これは猫撫聲を出して恭々しく見せるので、本當の肚にはないが口先ばかりでいふのがねこうや——である。それは兎に角として、敬まふといふのは恭の方の意味がある。恭といふ字は共と心との字で出来てゐる。共は兩手を組み合せるので拱といふ字がそれを示してゐる。そこで支那人が人にお辭儀をする時には（恰好をして）恭をやる時の心、即ちうや／＼しいことを行ふ時の氣持である。敬神の敬といふことに付ては支那人の言つて居ることが大變よく分る、色々の支那の書物に敬の説明をしてありますが、その中に易の文言の中に「敬以直内 義以方外」とありまして、敬を以て内を直くし、義を以て外を方くす、これは敬ひを以て心の中を正しくすること、心の中に正しい心がなければ本當の敬とはならぬ譯であります。併しこれではまだ上づらだけであります。もう少し支那の言葉で分りよいものを申しますと、國語といふ書の周語の篇といふものの中に「身聳除潔外内齊給敬也」——身聳は身おそりてとよむのですが、聳の字を書いて「おそりて」と讀ませてゐます。この普通にそびえるとよむ字を書いておそりてとよませてゐるのは意味がある。詰り平常はゆつたりとこんなにしてゐるが、敬ひになるとこの身がおそりて、これは懼りこの意味でもいゝのであるが、身心の中におそれる、恐縮する心が起る。その心と同時に身体がスツと杉の木や檜が聳え立つやうに姿勢が正しくなるのをいふのであります。それから除潔は除き潔めるといふのであるから汚ないものを去つて身体を潔くする、着物も着換へて出る、或は袴をはくとかいふことは皆除潔といふことになる。さうして外内齊給——外と内とがとよひそなはる。身の外の姿と心の内とが揃ふ、さうして不足がなく、どこにも缺點がない。これが即ち敬であると申して居ります。さういふ態度に現はれて來なければ本當の敬の意味にはならぬ譯であります。これで敬の字の意味はそれで済みますから、今度は敬神の本當の意味を少しばかり申してみませう。

斯様な譯でありますから、我々が神を敬ふといふことは、神様にまことの心を捧げるといふことを申すのであります。まことの心を捧げるといふ所に敬神の根本の意味がある。ところが往々神様にお参りする時に、お賽錢を少しばかり上げて、さうして色々なものを要求する。これは敬神どころの話ではない。不敬の極みです。我々の友達の間で實際だけを考へて御覽なさい。友達に少しのものをやつて何か澤山よこせといふのは友達の間でもいけないことで、そんなことはするものではない。自分の友達の間でさへもしてはならぬことを神様にしてよいかといふことを考へて載きたい。斯ういふことをやつてそれが敬神になるかならぬ、いはずとも知れたことである。さやうな事をすれば、その敬神は敬神ではなくて冒瀆であります。自分の兄弟にも友達にもしてはならないと、況や親に對しては尙してはならないこと、それを神様に對してやるといふことはどうしたことであるか、斯ういふことを敬神と考へてゐる人があるかも知れませんが、それでも、それは神を侮辱して居るものです。少しばかりの賽錢を上げて百萬圓も儲けさせて下さいといふそんな譯の分らぬ話はない。そんな敬神といふものはあるものではない。敬神の本義はさういふものがあつたら一切壞れてしまひます。親と子の間に於て、若しさういふことがあつたら親はどう考へますか、我が國の神道といふものは先刻申したやうに、神様がこの國をお生みになつた、この國をお生みになつた話をもう少し先を續けて申しますならば、大八州をお生みになり、次に八百萬神をお生みになつた、八百萬神と申しますのは神代の神様方です、我々日本人はその神代の神様の子孫である、さうでなければその後の、歴代の 天皇様の子孫であるといふことは我々日本人の最大多數がそれである。廣い意味に於て日本人は神様と親と子の關係にある。八百萬神といふ神様方が現在おいでにならぬやうに考へて居るのは間違ひです。我々日本人は神様の子であると考へてみる。神様の子とは何であるか、子といふのは未熟であるとか未成品であるといふことです。これが完成すれば親と同じものになることは間違ひない、その證據に皆さんの御兩親も皆さんと同じやうに若い時代があつた、それが太つて親になる、即ち我々日本人の考へでは我々人間は神の子で

ある。本質は神と同じものであるが、唯子だから麦の子でも米の子でも小さい、まだ子だから未成品、未熟、不十分である。併しながらこれが充實すれば直ちに神様になり得る。その證據にこの大東亞戦争に於て、どれだけの神様が出来たか分らない。この神様は俄かに出来た神様ではない。本質は神様であつたものが磨きがかゝつて地金が出て来たのである。八百萬神は日本國中至る所に於て成る、不斷は神の子である、出来上らないから子であるが、出来上れば神である。この神様と我々日本人は親子であるといふことが、これが神道の根源をなす思想であります。敬神の道もこのことを考へてくれば分る。御存じと思ひますが延喜式の八の巻に昔から傳つたところの祝詞が載つて居りますが、その祝詞の中には古いものもあり、新しいものもあるが、その内祈年祭の祝詞とそれから月次祭つきまつりの祝詞といふものが古いのであります。これらの祝詞を讀んでみると、神様にお祈りをするとか、お願ひをするといふ言葉が一度も出て来ない。これは我々の考へではこの祝詞はどうしても奈良朝以前の祝詞だらうと思ひますが、少しも祈るとか願ふといふ言葉が出て来ない。殊に祈年祭といふお祭は二月十七日を中心にして、御存じの通り、その年のお米が出来るやうにお祭を穀物の神様にせられる。だからこの場合に於て、今年は澤山お米が獲れるやうにして頂きたい、麥や粟が澤山出来るやうにして頂きたいといふやうに祈り、願はれさうなものであります。平たい言葉で言へば、今日これから農事をはじめます。今年の秋になりますと澤山お米を下さるに依つてお祭申上げるとあつて、下さいとは書いてない、有難うございますといふことだけである。詰り祈願がなくて感謝ばかりして居る。有難うとばかり言つて居る。殊にこの祈年祭の祈の字は祈るといふ字であるが、祝詞の中の文句には一つも祈るとも願ふともないのに、何故祈るといふ字を使つてあるかといふと、祈年といふ熟語は支那の詩經にあつて、穀物の神様を祭るお祭を祈年といふそのまゝを日本に使はれたものらしい。そこで支那人は實際祈つたのかも知れないが、日本人は事實上祈らない。それがいゝとか悪いとかいふではありませんが、實際に於てこの祈年祭の祝詞と月次祭の祝詞には祈るとか願ふとか、守り給へといふ

言葉がない。奈良朝頃から起つた祭にはさういふ祈願の言葉が這入るのであるが、それ以前には祈願の言葉がない。祈願がなくして感謝だけして居る。これは誠に不思議な現象である。昔からこの祝詞の研究者の間には不思議と思はれてゐたのであります。私の考へを申しますと、これは神様と人間とが親子の關係にあるといふ所に根柢があると考へる。我々親と子との間に於ては祈願は必要でないであります。感謝さへして居ればよいのである。私の子が私に祈願をしたら私は憤慨に堪へない。皆さん方でも子供さんがあなた方に祈願をせられたらどうなるか、お父さん今日は一つ御飯を食へさせて頂きたいと、斯ういふ態度で一々親に子が祈願をすると、親の方では非常に侮辱をうけたといふ感じですが、水臭いといひ、怪しからんと言つて親の方が憤慨する。親子の間には祈願は必要でない。必要がなければこそ、子に對して親は何でも供給する。寒くなれば着物を着せて呉れるし、腹が空けば御飯を食へさせて呉れる。月謝が要ると言へば月謝を出して呉れる。これが親そのものが不斷にやつて居る事柄であります。これに對して子供は有難うございますと言つて感謝さへして居ればそれで萬事が辨する。併し特別の場合には祈願もしなければならぬでせう。幾ら親でも毎月々貰つて居る小使を餘計に貰はうとすれば特別の祈願も必要だらうが（笑聲）平素には祈願は要らない。

斯様にして我が神道に於ては祈願といふことはなくして感謝あるのみ。その感謝の意を表するのを祭といふのであります。大休祭は色々特別のものは別と致しまして、春と秋の祭、これは丁度我々が朝起きて身体を淨め顔を洗ひ、兩親に對して「お早ようございます」と挨拶をする。寝る前に着物を夜衣に變へぬ前に「お休みなさい」と言つて兩親に挨拶して寝ると同じ事柄で、一年のはじめに於て春のお祭をし、一年の終りに近づいて秋のお祭をするといふことは、一日のはじめに於て朝の挨拶をし、一日の終りに於て夜の挨拶をするのと何程の違ひがありませんか。神道そのものと我々の日常生活は何も變りはない。斯ういふ場合に於て、我々は親に對して何もすることはない。況や前刻も申したやうに、親に強要する、一錢上げるから百圓下さいといふ、さういふ間違つた子供は一人もない。然るに神様に對してさう

いふことをするといふことはどうしたことでありませうか。敬神の道を失つて居ること夥しいのであります。これは明瞭に申して置かねばならぬと思ひます。

然らば本當の意味の敬神といふことはどういふことであるかと申しますならば、我々は神様に對して眞心を捧げる、まこと捧げる、これが敬神の根本の心であります。併しながら我々日本人は理窟でものをする人間ではない、これは西洋人や印度人や支那人と違ふ點であります。我々は凡ゆることを具體的に現はして來なければ安心しない、得心しないといふのが日本民族の一つの著しい特長であります。だから神様を敬ひ奉ると言つても、それが口先だけではいけな、先刻申したやうにわざ、に現して來なければならぬ。神道はわざに依つて傳つて居ると申しましたが、しわざに依つて傳つて來なければいけない、形の上に現はして來なければいけない、兎に角具體的な事實の上に神様に眞心を捧げるといふことを現はして來なければ敬神の實は擧らないのである。その敬神の實といふものは何に具體的に現はれるかと申しますと、先刻も申しました祭と祝、この二つに現はれてくるのであります。祭といふのは何であるかと申しますならば、祭といふものは眞心を神様に捧げる、その神様に眞心を捧げることを事實に現はす、その事實を祭と申すのであります。この祭には現はすところの事實は三つになつて参ります。幣帛、祭儀、祝詞の三つ、何故これが三つに現はれるかといふと、三つに現はれる譯がある、難かしい事柄ではない、我々日本人は自分の眞心といふものを人に捧げる場合、心といふものは目に見えませんが、自分は斯ういふ心であるといふ心を物に現はして來る、こゝに物心一如といふことがある。必ず或る物に心を具体化させて示さうとしてくる、其處でお供物が必要になる、これは物と心とは一つといふ日本の思想から來る、西洋流の物の考へ方をする人は、物には心が這入つてゐないと言ひますが、私は決して左様には考へない、苟くも日本人である以上、物に心が這入つてゐないといふ考へ方をしたら大間違ひであります。例へて申すならば茲にコツプがあります、コツプは品物です、この品物に心が這入つて居らぬといふことはどうして言へ

ますか、若し人間の心といふものが働きかけなければ、硝子が何時コツプになつたでせう。硝子を放つて置いてはコツプになりは致しません、硝子がコツプになるのはこれをコツプにしようといふ心が働きかけなければコツプにはならない、即ちこのコツプには人の心が通つて居る、さうではありませんか、次にこのコツプがこの机の上のお盆の上にあるが、これがどうして茲に來ましたか、コツプは歩いて來る譯に行かない、コツプが茲に來るには、山田といふ奴、喉がかはくだらう、水を吞ましてやらなくちやいけないといふ心が働いて居り、唯歩いて來て居るものでない、あらゆる物に人の心が這入つて居ると考へなくちや日本的なものではありません。西洋の變挺な哲學者は物と心とは別だと言つて居るが、心と物と別なものはない、殊に人間のしわざに於ては明らかに物と心とが一緒になつて居ります。そこで日本人は心を通して形に現はすが、心を形に現はす場合に於て色々の現はし方がある中に於て、兎に角物に現はす、品物を以て自分の眞心をこめたものとして、これを尊敬する人若くは愛する人に捧げる。眞心を捧げる場合、品物で現はして捧げる、これが即ち幣帛の生ずる原因であります。供物の生ずる原因であります、茲に於て物と心とは一つ、さうして供物をしないところの祭といふものは本當の意味のお祭ではありません。皆様方が神様にお参りなされる時に一錢でも紙一枚でも捧げられるといふことはこの幣帛の意味です、自分の眞心を神様に物で現はして捧げる、さういふ心持で捧げるのであつて、一錢上げて澤山貰ふといふ譯ではない、一錢上げて澤山貰ふといふことは商賣をして居る以上、賭博をして居るやうなことにもなり、さういふことでは神を冒瀆する譯です、この心は只今の妙な所謂新しい教育をうけた人には往々非常に輕薄になつてしまつて居るものがあります、神様をお祭する場合には何としても品物を供へねばならぬといふことだけは神道の人は心懸けておいでになりますから間違ひはないが、まちつた西洋の學問をした人は一錢位上げて神様は有難くもなからうといふ、神様は一錢あげたからといつて得をせられるといふのでもない、たゞ自分の眞心を捧げるのであるからそれは一錢であらうが、二錢であらうが、百圓だらうが、一萬圓だらうが神様から見れば同

じこと、高い、安い、多い、少いの問題ではない、自分の眞心を捧げるのである、私の友人の所に徳富蘇峯君が夫婦で訪問された時の話であるが、その時徳富蘇峯氏は土産を持って来た、何を持って来たかと申しますと蕪青を一把握つて来たといふ話である。その蕪青がこの節ならば少し高いけれども、その時は蕪青一把は大したものではありませぬ、まあ拾銭かそこらの蕪青一把で五ツ六ツのものを徳富さんが土産に持つて来た、さうしていはれるのに「この蕪青は私共夫婦で作りました蕪青であります、どうぞお上がり下さい、自分らの眞心こめて作った蕪青です」と言はれたといふ事である。それはどうせ百姓は上手でなからうから上等のものが出来たかどうか知らないが、眞心といふことを考へて見れば上手下手の問題ではない、昔平田篤胤先生が江戸から幕府の命に依つて退去を命ぜられた、正月に江戸から退出して夫婦で下野の仁良川といふところに四月頃迄滞在して居られたが、その節に篤胤先生を非常に世話して呉れた屋代弘賢といふ先生が亡くなつた、その弘賢先生の靈を弔ふために平田先生は夫婦してその仁良川といふところで餅草を摘んで来て、二人で草餅を作つて、自分の友人の屋代弘賢を祀られたことがあります。斯ういふのは本當に眞心が物に現はれて居る、その草餅も平田先生が作ったよりも外の人が作った方が上手であつたかも知りませんが、併しながら夫婦御自身で作られる、茲に眞心がある、又私の教へた人が秋田の中學の教師をして居りますが、二月の末頃に自分等夫婦で餅を搗いて、そして私の所に送つて来た、私共はただの餅でないと思つて非常に感謝して頂戴したが、眞心を現はすのに、物に現はして奉るといふことが日本人の本當の心の現はれなのであります。その物の値段が高いとか安いとか、さういふことに問題があるのではありません。神様に供物をするその心は子の心であります。茲に面白いことは、この幣帛を昔からみてぐらと讀む、みてぐらといふのは充座、くらといふのは物を置く場所、置く臺の上に物がみてる、一ぱいをする、併しこれが物質的に一ぱいにならなくてもよろしい、自分の心一ぱいのものであればみてぐらです、自分の眞心のありつたけを持つて来て供物をする、例へて申しますならば、子供が何かの使ひでもして一錢駄賃を買つて

その一錢の駄賃をそつくり神様に供へるならばこれは子供として全部を供へて居る譯です、これが心の話、先刻申した眞心を物に現はしてくる場合です。

次には祭の儀式である、物に現はしただけではまだ祭といふものは本當のものにならない、茲に我々身体の舉動に現はしてくる、我々の心の中で神様に眞心を捧げるといふ心があるならば、それが人間のしわざの上に現はれてくるのは當然のことであつて、茲に祭の儀式といふものが現はれてくる、この祭に對する儀式は我々のやうな神官でない者が祭をする場合には、唯神様の前に行つて眞心を現はして拜し奉るといふだけでもよろしい、併しながら本當の神道の細かい儀式に至つては、これは色々學ばなくちゃいけないが、我々が祭をするといふ場合には、親しく身体舉動の上に眞心そのものが現はれて来なければならぬ、人間が身体を有つて居る以上、その身体に眞心が現はれねば眞心があるかといか分らない、その眞心を人間のしわざに現はす、これが祭の儀式であります、所で祭の儀禮といふものは、それは神道ばかりでない、佛教にもあれば耶蘇教にもありますが、我々の知つて居る範圍で申すならば、神道のこの儀式程莊重嚴肅極まりないものは世界にないと思ひます、實際神官が神様の前で本當に鞠躬如として拜禮をして祝詞を奏上して居られる所を我々が同席して居つたならば、それこそ神様がおいでにならないと思つて居る人間でも、神様がおいでるか如き感じの起るのは當然です、世界中に神道の祭の儀式程秀れた儀式といふものはないと私は信じて居ります。若しこれを亂すやうなことがあつたならば、我が國の亂れることのはじめになると覺悟しなければならぬと思ひます。兎に角莊嚴極まりないものが祭の儀式であり、極めて單純ではありますけれども、莊嚴極まりないものであるといふことを、我々の經驗上覺ゆる次第であります。

次には祝詞でありますが、祝詞と申しますと大變難かしく見えますが、簡単に言ふならば神様に申上げる言葉であります。これは又人間といふものは自分の心といふものを言葉で現はすものであります。言葉で現はさねば本當の眞心と

いふものは現はれて来ない、従つて茲に言葉で以て神様に真心を捧げ奉る、儀禮の場合は身体と心とが一致しなければいけないが、この場合には心と言葉が一致しなければならぬ。兎に角人間であります以上言葉を以て心を現はす、これが祝詞です。次に自分のしわざで心を現はす、これが祭の禮、もう一つは自分の心を形のある物に現はす、これが供物で、この三つが揃はなければ祭にはならない。所が茲に面白いことがあります、延喜式の祝詞を讀んで見ますと、神様に申上げる言葉の中に「稱辭竟奉」稱へはお賞め申す、神様の御徳を有難いといつて賞める言葉が稱辭で、おへまつるといふのはすつかり出してなくなつてしまふ。自分の有つて居る神様に感謝し奉る言葉のありつだけて申してしまつた、あとにはもう何も申上げる言葉もなくなつてしまつたといふことが稱辭竟奉である、俗な言葉で言へば財布の底をたいてしまつてもう何も無いといふやうに、これ以上申上げる言は無くなつた。もう何もありませんといふのが稱辭竟奉である。さういふ譯で神様に御禮の言葉のありつだけて申上げてしまつた。もうこれ以上は何とも申しやうがないといふのが稱辭竟奉、これが祝詞の根本精神である、ところで面白いことには、「たたへごとをへまつる」といふことは祝詞の場合だけでなく、お供物の時にも言ふ、何々をたたへごとをへまつる、といふ。これは何々をお供へもうすといふ意味である。これは少しく弊害があるやうであります、よく考へてみると矢張り大變面白い意味を有つて居る、言葉で以て神様の神徳をお賞め申上げて真心のありつだけて盡し奉つたといふことが稱辭竟奉といふ言葉であるが、その心持と同じ心持で供物をする、即ち私共の供物と致しましては、これ以上の供物は出来なないといふ所まで、これでもう精一ぱい、これ以上どうにも斯うにもならぬ所のお供物がこれでございませといふので、何々をたたへごとをへまつるといふのである。結局稱辭竟奉といふことが敬神の根本義になる、神様を稱讚し奉り、神様の御神徳を感謝し奉るといふことが、物、言葉、儀式總ての點に於て精一ぱい、ありつだけて盡すといふことが、たたへごとをへまつるといふ言葉である譯であります、これは一方から考へますと大變面白いことでもあります。どういふ譯かと申しますと、私

が今まことといふことを申しましたが、まことの誠といふのは心を指す、それから言葉の眞言、結局祭に於ては言葉のまこと、しわざのまこと、物のまことと分けてみると三通りの形に現はれて来る、兎に角まことを神に捧げ奉る、これが即ちたたへごとをへまつるであり、これが祭であります。

今度は祓について申します。祓といふものはどんなものであるか、祓といふものは、我々が祭をする前には必ず祓を致します、祭をする前に神官がどういふ祓をするかと申しますならば、一番先に供物、神饌を祓ふ、その次には祭に参加する頭、齋主を祓ふ、それから祭に参加する祭官を祓ふ、それから祭をする所の一般の人を祓ふ、總ての人を祓ふ、祓をせずしての祭といふものはありません。これは神道の行事の第一の重大な事柄である。何故祓をしなければ祭をする事が出来ないかといへば、これは神様に穢れた物を捧げてはいけない、神様に穢れた身体で奉仕してはいけない、即ち神様を汚すまいといふ考へが第一、併しながら神様を汚すまいと言つても矢張り汚して居るかも知られぬ。さうであつてはいけないといふことで、即ち自らを淨める、神様を汚すまいといふことは同時に自らを淨めるといふこととなる、さういふ心でなければこの祓といふものは起つては来ない、祓といふことが起つて来るといふことは、祓が不可能なことでは祓にはならない。幾ら祓つても祓の効能がなければ祓ふ必要がないと同じ様に、祓をするには祓が可能であるといふことが要るのであります、祓が可能であるといふことはどういふことであるか、我々の罪や穢れを祓ひなくする、その罪や穢れが祓ひ去られねば祓にはならない、我々の借金でもさうである、拂つてしまつたといふが、又あとから取りに来られるのでは拂つたことにならない。祓はないのと同じことであれば誰も祓ふ必要はない、神道に於ては祓が可能であり、又何を祓ふかといふと、一つの言葉で言へば罪穢れを祓ふのであります。罪穢れとはどんなものであるかと申すと、これは大祓の言葉にありますから御存じと思ひますが、普通にこの罪穢れを祓ふといふことを單純に申しますと、學生諸君は別に罪を犯したことはない、その證據に警察に引つぱられたこともなければ、裁判所に行つたこと

もない、先生に叱られたこともないから、我々は罪も何もない、穢れもないといふやうに考へられるでせうが。神道で申す所の罪や穢れといふのは、さういふ単純なものではありません。それならば神道に於て言ふ罪や穢れといふものはどういふものか説明して見ろ、斯う仰しやられると私にもこれは説明出来ない、失禮ながらどの學者も罪といふものはこんなものだ、穢れといふのはこんなものだと本との説明は出来ないと思ひます、そんならどうするか、問題は茲にある、問題はどこにあるかといふと、我々は罪や穢れがどんなものかといふことは問題にしてもせんでもいゝ、我々の目的は罪穢れを去るのが目的である、いや去るのよりも罪、穢れのない人間になるのが目的である。さうなつて來ると、罪、穢れを研究することは必ずしも必要はない、これを考へ違ひせぬやうに願ひたい、我々が良い人間になるには悪いことをしてはいけない、併しながらその悪いことゝいふものが如何なるものであるかとそれらを全部研究しなければ良い人になれないかといふとさうではない、はじめから悪いことをしなければ、悪いことはどんなものかといふことは知らなくてもよろしい、下手に學問すると、罪、穢れとはどんなものか、といふことが分らねばそれをなくすることが出来ないと思つたりする、健全な状態といふものは病氣のない状態である、病氣を全部研究しなければ病氣のない姿にはなれないといふことはない。それをよく考へて頂かなくてはいけない、我々の目的は罪、穢れのない者となるのが目的で、罪、穢れがどんなものかといふことを研究する必要はない。それは自分の内の塵溜を研究する必要がないのと同じで、塵埃とは何ぞや、要らんものが塵埃である。それでよろしい、即ち人心に食つついて居つてはならぬものが罪、穢れ、そんなものはない方がよろしい。そして要らぬものは研究する必要はない。我々の目的は罪、穢れのないのを目的とする、これが眼目である。然らば罪、穢れのない姿といふものを我々が考へて來る必要があるので、一つ／＼の罪や穢れを研究するのは第二、第三の問題であつて、場合に依つては少しも研究しなくてもよろしい。兎に角眼目は罪、穢れを去つてしまつた姿になれといふ點にある。所が罪、穢れといふものを説明しろと言へば誰も出来ないけれども、罪、

穢れのない姿は誰でも知つてゐる。それは祝詞を讀んだこともなければ大祓をうけたこともない人にあらはれてゐる。それは生れてから一年も経たぬ赤ちやんである、お母さんのふところに抱かれて腹一ぱいお乳を呑んでいゝ氣持になつてスヤ／＼と眠つてゐる姿、それはどんな人もその赤ちやんの顔を見て、この子は罪のない顔をしてゐますなあといふこれが罪のない姿、斯ういふ姿になるのが祓の眼目であります。今までの祓の研究は罪、穢れの研究をしてゐた、塵溜の研究をしてゐた、それは根本的な間違ひであります。罪や穢れはどうでもいゝ、罪や穢れのない姿、即ち赤ちやんのやうな純真無垢な心になれといふことです。純真無垢の心になれば我々の本質が現はれて參ります。人間は神様の子であるといふ、それ故にその人間の本質は神様と同じものに相違ない、因より我々は神様の子であるから小さい、麥とメリケン粉の一粒と同じ位のまだ／＼小さいものでありませうが、併しながら本質は神と同じであるといふことを我々は考へて來なければならぬ、さう致しますと、茲に我々が純真無垢な本質の姿を現はして來れば大小の違ひはありませんけれども、神様と我々とは本質が同じである、本質が同じであるといふことになる、これを音楽的な言葉で言へば振動数の土臺が同じである、振動数の土臺が同じであつた場合には、それが二倍であり、三倍であり、五倍であり、十倍であつたと致しましたも、オクターブの差があつても、それが幾ら違つても振動数が同じであれば共鳴する、即ちオルガンであれば真中のハを抑さへて音を出すと、それが一オクターブ低いハも、もう一つ低い所も、高い所も、ブル／＼と鳴ります。これが共鳴、その共鳴はオルガンでなくても物理學で二つの音又、又は三つの音又があつても、その振動数の基礎が同じであれば、一つを叩きますと、外の音又が同じやうに音を發する、若し振動数の基礎が違へば幾ら音を大きくしても一方は知らん顔をして居る、即ち神と我々との本質が同じである。同じであるといふことに依つて、今我々が祝詞を申し上げますと、それが神様の耳に共鳴を起さすのは當然である。斯様にして祭をする前に祓をするといふことは、祭をして可能ならしめる、可能ならしめるといふことの一面は神様を穢し奉らぬといふことに於て可能であり、

一面に於て見ると我々と本質が同じでありますから、我々の眞心を以てたたへをへまつる場合に於て感應遊ばされるといふことは當然であります。これは物理学でも證明出来る譯であります。斯ういふ譯でこの祭には必ず祓といふことが先立つて行はれる。これで敬神といふものの本當の意味はこんなものといふことを申したのであります。これからの敬神といふものとの實際の世の中の關係を少しばかり申して置きます、我が國は昔から神國であると言はれて居りますが、我が國のあらゆる事柄は神様に仕へ奉ることを一番はじめにする、御存じの通り大寶律令に於ては官制は二官八省と申しまして、只今の内閣に相當するものが太政官、その上に神祇官を置かれましたその神祇官が太政官の上にあるこれは神様に仕へまつる役所、斯ういふことが日本の昔からの政治のやり方でありました。又宮中に於かせられての作法は神事を眞先にせられてゐる。順徳天皇の「禁秘御鈔」を讀んでみてもそのことがはつきりと書かれてあり、歴代の天皇 皆その通りに行はれて居られる。尙又延喜式等を讀んでみると、政治を執行する場合に於て、幾多の奏上することがありまして、先づ一番先に神様のことを申上げる。斯ういふ規定になつて居ります。又實際、現在の政治で御考へになりましたも分る通り、一月四日に「政始」がありますが、この場合に於ても一番先に總理大臣が 陛下に奏上致しますことは、伊勢神宮に關する御事でありまして、その神宮のことを奏上せられて 陛下の御裁可を経なければ、その次の政務のことに移らない、それは昔からの事柄であります。如何なる場合に於ても神様に關すること、それが眞つ先に行はねばならぬのであります。又御存じの鎌倉幕府の頃北條泰時の時に貞永式日を定めました。これは幕府の制度であつて、朝廷の制度でないが、五十一箇條あり、その第一條が神社に關することでありました。又足利將軍義尙の時、一條兼良公が政治の要諦を教へた樵談治要といふ書物があるが、それにも眞つ先に敬神のことを説いて居ります。如何なる場合に於てもさうなつて居ります。又地方に於て地方官が就任を致しますと、今の地方長官、その時分は國の司、その地方官が就任致します場合に於ては、眞つ先に神社に參拜して神様を拜む、それが済まねが政務を執ることが出來

ないといふ規定になつて居ります、政治を執つてから神様に參るといふのでなく、お参りしなければ地方廳に出て事務を執れない、又お参りする順序がその國々に依つて定つて居ります、それが一宮とか二宮といふ言葉が起る原因です。一番先に參る神社を一宮と、斯様になつて居ります。こちらの田村神社が一宮といふのもさういふ時の制度の名残りであります。

斯ういふやうに敬神といふことが我が國に於ては眞つ先に行はねばならない。この敬神の道が正しく行はれて居るか衰へて居るかどうかといふことに依つて、甚だ面白くない話であります。國家の盛衰迄も分ると思ひます。これは敬神の道の消長といふものを一々御調べになれば分る。敬神の道が衰へた後は間もなく國が衰へて来る、敬神の道が榮えるとその國が榮えて参ります。只今伊勢神宮ではこの二十四年に二十年目の正遷宮が行はれる筈で御造營が始められることになつて居りますが、二十年目、昔は二十年目、只今は二十一年目ですが、今の御殿を改め造つて遷宮を申上げる。これが天武天皇の御代から現代迄續いて來て居るのであります。所が、この正遷宮が正しく行はれたのが、後醍醐天皇の御代迄、それから後は段々延び／＼になりまして、場合に依ると百二三十年の間、この正遷宮が行はれなかつた、それは足利氏が政治を執つて居りました時代、それから織田信長、豊臣秀吉が出來て來てこの正遷宮が古への正しきに戻り、徳川時代に於てはそのあとを引受けてその通り進んで参りました、私は伊勢の兩大神宮の正しい遷宮が規則通りに行はれるか行はれてゐないかといふことだけで、我が國家の盛衰が直ちに分ると申上げるのであります。

尙又 天皇御一代の御祭の大嘗祭、是亦足利氏が勢力を逞しました時代には行はれなかつたが、徳川時代の中頃から復活して只今は十一月二十三日の夜から二十四日の朝にかけて、陛下が夜通しお祭になります所謂新嘗祭、是亦足利氏が政權を執つてゐた時代には中絶して徳川氏が政權を執つた時代の中頃から復活した、又只今の制度で申すならば十月十七日、昔は九月十七日であります。十月十七日に神嘗祭が行はれる、伊勢の大神宮様の一番のお祭であります。そ

の場合に於て朝廷から幣帛使を遣はされるのでありますが、これも矢張り衰へて、徳川氏の始め頃に復活した。左様に敬神の道が衰へるか、又は榮えるか、さういふことに依つて日本の國の盛衰が考へられる、斯ういふことは我々は深く考へて見る必要があると思ひます。さういふ意味から申しますと、神事の復興、神様をお祭することが復興するといふことは國の榮えを取戻す、さういふことになると思ひます。我々は織田信長や豊臣秀吉といふ人々を何時迄も感謝し措く能はざるものがあると思ひますのは、これらの人々に依つて、皇室を尊び奉り、神様を敬ひ奉るの道が復活して來たのであります。斯ういふ意味に於て織田信長が別格官幣社に祀られ、豊臣秀吉が別格官幣社に祀られて居るといふことは誠に有難いことでもあり、又恐懼措く能はざる所であると思ひます、敬神の道が榮えるといふことに依つて國が榮える、逆に申しますれば、國が榮えるといふことは一方に於て敬神の道が榮えることだと言つてもよろしいと思ひます。昨今支那事變が起りましたから敬神の道が餘程盛んになつて來たことは、我々目のあたり見て居ります、大東亞戦争が起つてから一層この敬神の道が興隆して來るに相違ないと思ふのでありますが、現在又興隆しつゝあります、はじめに申しましたやうに、この日本國といふものは惟神の道、この道に依つて今日迄榮えて來て居る、將來永遠にこの國が榮えて行く根本と致しましては、この敬神の道といふものが根源をなすものであるといふことは信じて疑はないのであります。併しこれは日本全國に付て一纏めにして言ふだけでなく、一地方に於てもこれを言ひ得ると思ひます。その地方が榮えればその地方の敬神の道が興隆する、又逆にその地方の敬神の道が興隆すれば其の地方は必ず興隆致します。その地方の興隆を望む時、敬神の道を盛んにせずして地方の興隆を望むは間違つて居ると思ひます、勤くも大日本國に於ては間違つたやり方であると思ひます。一軒の家に於てもその通り、敬神の道がその家に於て榮えるならば、その家は自ら榮えます。あらゆることが神に仕へまつる道を根本としなければならぬ、今茲には若い方がおいでになりますから、敬神といふことを申しても、或は十分分らぬかも知りませんが、十分分らぬといふことは少しも私は苦にしない

ただその心得があればいつかは分るのであります。どこまでもこの敬神の道といふものが神國そのものの根柢をなすものであるといふことを十分に御考へを願ひたいと思ひます。

當香川縣に於て敬神の道が興隆致しますならば、この香川縣の興隆は必ず實現する、敬神の道とは先刻申したやうに眞心を神様に捧げることであり、物質的にかれこれ申すのではありません、眞心を以て神に仕へまつる、眞心を神に捧げる、この眞心が敬神の根柢をなすものである。この敬神の道が神國そのものの古今を貫いて居る道であるといふことだけを最後に申上げてこの講演を終ります。(拍手)

以上

(文責在記者)

120
185

終